

書に於ける著者の学究態度を見るべきものと考へられる。この語釈の部分は著者が最も力を入れた部分と見てよからう。

次に解説の部分を見て行くと次の通りである。

「あふ坂の関守にゆるされてより」に始まる書出しから、それに続くやゝ長い道行文は、秋成の彫鏤苦心の跡が行間に溢れている……然し実をいえばこの書出しは翻案である。基くところは、西行作と言伝えられていた撰集抄卷二の四「花林院永玄僧正の事」の一節であるとして、其の文章を引用して居られる。而して「兩月物語」は時代小説であるとともに翻案小説である。和漢の古典を典拠にふまへながら、その上に開花した文章である、云々と和月全体の評をも加へて居られる。著者の神経は、何れの箇所を取つてもゆるむことはない。

又補説を見ると、崇徳院と西行との問答に就いて、中村幸彦博士の説を引用し、真淵の国学の影響を認め、又一方蕃山の集義和書、羅山の本朝神社考の説なども対比して、其の秋成の思想の基く所に迫らんとして居られる。

此等は、各項目のほんの一部分の又一少部分を摘出したばかりで、著者の博搜は読者に更に多くの事実と、更に多くの考へ方を提示し、興味深く兩月物語の問題点を解明し、正に兩月物語百科辞典とも云ふべき様相を呈してゐる。否啻に兩月物語に止まらず、兩月物語による上田秋成学樹立とでも云ふべきものであらうか。

本書には、本文の外に、中村博保氏の筆になる、概説があり、また此兩月の出版の事、秋成のこと、其の時代のこと、短文乍ら

要を尽して便利である。卷末の兩月物語の典拠及び関係書一覽、参考文献一覽、語句索引等も、本書を左右に置いて活用するには、便利なものとならう。

最後に私は本書を手にして、内藤忠明著内安録の記事をふと思ひ出したので、結びとして書加へておきたい。

大田原より塙保己一に、徒然草の諸抄大成（浅香山井撰）はよく委敷注を書たるものにて、見るによきものと存候、いかがと問ければ、徒然草を書たる兼好は、諸抄大成に書たる程は、ものは知るまじきとて笑ひき。

此は原作者と、後の学究との宿命的な関係であらうか。最後に、本書が兩月物語研究の最高標準に立つもので、同学を益すること大である事を信じて疑はない。妄言多謝。

久保田芳太郎 著

### 「戯作と無頼——現代文学私観——」

東 郷 克 美

これは小器用にまとめられた「実証的」研究論文集などではない。文学へのきびしい告発としたたかな思想的冒險にみちんだ。この鮮烈な相貌をそなえた書を自分の身の丈で矮小化してしまふことを恐れるが、以下は久保田氏の世代を先行者と仰ぎながら、歩みはじめた者の内容紹介を兼ねた感想である。

氏の十年來の仕事を取めた第一評論集である本書は三部にわかれていて、第一部では昭和期の文学者——伊東静雄、三好十郎、坂口安吾、織田作之助、田中英光、三島由紀夫、江藤淳が扱われ、さらに戦後の「近代文学」と「政治と文学」論争をめぐる論文が収められている。第二部では大正期の有島武郎と大杉栄における「政治と文学」が論じられ、第三部は研究者としての久保田氏の専門である森鷗外関係の論文三篇が集められている。一見してまったく雑多で異質な対象が並んでおり、「戯作と無頼」という表題のつけ方とともにちょっと途惑わざるをえない。しかし、鷗外は別格として、その多くはいずれも不敵な面構えをもった、近代文学史上の異端ないしは傍流の文学者たちであり、氏はその再評価を要求しているのである。関心は近代日本のほとんど全域にわたっているが、近代文学の正統たる自然主義及びその系譜に属するリアリズムの作家は一人もとりあげられていない。おそらくこの觀念の美食家にとって素朴實在論の世界などほとんど関心の外なのであって、伊東静雄、坂口安吾、三島由紀夫のごとき観念家こそ好餌なのだ。

さて、全体を読み通してみるとき、この十四篇の論文が一貫した問題意識で書かれていることがよくわかる。その意味で、長篇評論を読み終えたときの感動と重量感があつた。そのモチーフを一言でいえば虚無からの創造ということになるか。つまり存在の底の虚無に対する凝視とそれを克服・止揚しうる方法への摸索である。そのようなモチーフの根源にあるものは久保田氏の戦争と敗戦の体験であるといえあまりに唐突にすぎようか。氏は戦

争が自己の内部に虚無を生みつけていったという意味のことをしばしば語っている。このような虚無の原体験が氏を文学へかりたてたものであることはほぼまちがいあるまい。氏にとって文学とは存在内部の虚無の意味を確かめ、それからの自己回復を願うことにはかならぬ。作品そのものより作家主体のあり方に関心があるという久保田氏はつねに作家の精神の暗部に掉さしつつ、存在の裸形に迫ろうとする。作家は存在の深奥部に虚無の深淵とでもいふべきものをもっていて文学はそこから吹き上げて来る。自己疎外の認識とその克服によつて生の解放を願うという点では政治も文学も別のものではないはずで、そこから氏における政治と文学を一元化しうる切点の追求という命題も生まれて来る。

巻頭に掲げられた伊東静雄論は文字通りの圧巻である。処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」の世界を日本の一切の外的現実を拒絶し、その現実喪失感によつてひたすら西洋的な内的存在の樹立をはかりうとしたものとしてとらえ、詩集「夏花」への移行はそのような「西洋の図」への志向から日本の現実への回帰のコースとして把握する。ここでも伊東における「意識の暗黒部」との必死な格闘「萩原朔太郎や保田与重郎との比較において論じられている。三好十郎におけるマルクス主義批判についてもその根本的なモチーフはマルクス主義が外的世界の矛盾を克服するものではないにしても、三好自身がせおった内的矛盾・疎外された存在の底辺にある虚無に解決をもたらすものでないという点にあったとする根源的思考が示される。また坂口安吾をはじめとする無頼派作家はその「投げ出され疎外された存在、そこからの捨て身の抵抗

の姿勢」が高く評価される。つまり「虚無からの創造」にその本質をみるのだ。一方、三島由紀夫に対しては深い現実喪失感から出発しながらも、言葉への絶対的な信仰をもつことで存在自体から遊離してしまったと批判している。自己疎外の状況認識に立つ氏は三島が信じたような言語の美など信じないのである。

久保田氏の「近代文学」批判はその無頼派評価と対応しあっている。すなわち「近代文学」同人は戦争中の「実存の体験」から出発したにもかかわらず、戦後の現実の中で既成概念の中に安住し、存在を否定的媒介としなかったために「実存との接触」を失い、その結果、政治と文学を統一するヴィジョンも生み出しえなかったとみている。こうした氏の批判はまた「近代文学」同人の無頼派作家に対する不当に低い評価と正確に見合っているはずだ。いわゆる「政治と文学」論争についても歴史と人間の全的なものへの志向を媒介として各自が存在そのものと真剣な対決をしていない点をついている。このような戦後文学の「政治と文学」論のあり方への批判から、久保田氏は大正期の有島武郎の「宣言一つ」の意味するもの——その全き自己否定の視点、自己疎外に徹し切った根源的な自己認識の再評価におもむき、そこに政治と文学の二元論を一元化する可能性の原点をみようとすることだ。さらに進んでは自己疎外回復のための革命というヴィジョンによって政治も文学も一元的に統一されていた大杉栄の「近代思想」のテーゼに大きな可能性を見出し、それが「近代文学」の人々に正しく継承されていないと説く。

かくて、自己疎外をもたらず一切の形式の固定化・秩序化を糾

弾し、それに反逆するものとして文学をとらえる久保田氏にとって、作品の完成度を価値判断の基準とするような考え方は文学的「骨董」趣味なのであって、既成文学の形式をはみ出しあるいは破壊して行くところに文学の本来の性格があるということになる。このように読み進んで来ると、この評論集が「戯作と無頼」と冠されている理由もよくわかる。「無頼」とは疎外を強いるものに対する存在の反逆と自己回復の行為であり、「戯作」とは既成の形式を破壊しないではやまぬ作家主体の自己表現の謂である。そしてこの両者、いわば言葉と行為の二律背反を超えるものへの志向が本書の主題である。以上のようなテーマと森鷗外への関心とは、どこでどのようにつながるのだろうか、私にはまだ十分納得いかないが、「舞姫」についての周到な読み、明治四十年代の政治状況に対する鷗外の態度についての鋭い切りこみなどさすがに年期を感じさせる。

文学研究が自己表現たりうるかどうかは議論の存するところであらうが、少なくともこの本がまさしく久保田芳太郎氏の自己表現の書であることだけはまちがいない。

(昭和四年七月・現代思潮社刊・四六判二九六頁・八五〇円)